



ルソー思想における性と生殖：
性の管理と自己犠牲する母

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004810

論文

ルソー思想における性と生殖 ——性の管理と自己犠牲する母——

浅井 美智子

はじめに

『性の歴史 I 知への意志』においてフーコーの示した「抑圧の仮説」は、その後の性現象の学問的アプローチに対し多大な影響を与えた。「抑圧の仮説」とは、ヴィクトリア期以来、今日に至るまで続いている性に対する抑圧的言説の堆積（抑圧の年代記）——性は抑圧されている／性を抑圧すべき／性を解放すべき——、それ自体に解くべき課題があるというものである。たしかに、性について語られる言説は、「抑圧」／「解放」の形をとりながらブルジョワ階級と資本主義に適合的に増大し、それらは今日まで続いている。

本稿では、18世紀以降の「合理的言説による性の客体化と、各人が己れの性を語るという務めを果たすための作業」（フーコー [1976 : 46 = 1986 : 44]）が、ルソーにいかに関与したか、またルソーはその影響下で性に対するいかなる言説を構築したかを検討する。前者は「人口統計学、生物学、医学、精神病理学、心理学、道徳、教育学、政治批判」（フーコー [1976 : 46 = 1986 : 44]）という形をとり、後者は、19世紀に花開いた恋愛小説、私小説（告白）などである。ここではそのリプロダクション論を検討するにあたり、おもに『告白』、『エミールとソフィー または孤独に生きる人たち²』、『新エロイズ』を参照する。同時に、社会史（歴史人口学）が明らかにしてきたブルジョワ家族が実践し始めた再生産のあり様、また、17世紀以降に展開された性と生殖に関わる科学的・医学的言説につい

² 以下、『エミールとソフィ』と省略する。

て言及する。

このような帰納法的手法をとるのは、ルソーは体系的なリプロダクション論を残していないが、フーコーが言うように、性現象に付随した科学や医学的言説、巷で語られるさまざまな言説の影響を受け、自伝的著作や小説、教育書等を残しており、そこで、性と生殖の言説を構築しているからである。それはまた、『社会契約論』等で展開された国家論を補完している³と考えられる。つまり、ルソーのリプロダクション論は、その後ナポレオン法典に結実した「人は、家族という小さな祖国を通じて大きな祖国に繋がる。よき国民を形づくるものはよき父、よき夫、よき息子である」(稲本 [1985: 321])⁴の背理だと考えられるからである。

1. 性秩序の変容——性と生殖の分離——

(1) 生殖のコントロールのはじまり

第二次世界大戦中にフランスで胚胎した歴史人口学（通称「アナール」学派）は、家族研究とりわけリプロダクション論に多大なインパクトを与えた。とりわけ、Ph.アリエスは子ども時代が近代とともに誕生したことをあと付け、われわれの時代が自明としている子どものもつ意味の特殊性を明らかにした。つまり、西欧近代が実現した結婚生活とともに望まれる子どもは、「その両親がもたらす楽しみをもふくめて、多くの理由で歓迎され、愛される」(マクファーレン [1986=1999: 61]) 存在となっていた。このような夫婦と歓迎される子どもという家族を実現したのはブルジョワジーである。しかし、この家族には生殖はあっても性は隠蔽されている。

³ ルソー思想には両立しがたい二つの共同体があると指摘されてきた。ひとつは「スバルタ的国家共同体」であり、もうひとつは「家族的共同体」である。水田珠枝氏はこの二つの共同体を分析し、「ルソーの家族と国家は、構成員の服従を要求する強制的組織である点では類似性をもつとしても、それぞれの組織原則は異質なもの」(1988: 71) であると指摘している。近代以降の国民国家はまさにこの二つの共同体が相互補完的に構成されている。詳細は、拙論「ジェンダー視角からのルソー思想の検討——二つの共同体、その相互補完のディスカール」(浅井 [1997b])。

⁴ 1804年にナポレオン法典における民法起草者の一人ポルトリスは法典の提案趣旨説明をこのことばで結んでいる。

フーコーは言う。「17世紀の初頭には、まだある種の率直さが通用していた、…この白日の光に続いて、たちまち黄昏が訪れ、ついにはヴィクトリア朝ブルジョワジーの単調な夜に至り着く。性現象はその時、用心深く閉じ込められる。新居に移るのだ。夫婦を単位とする家族というものが性現象を押収する。そして生殖の機能という真面目なことの中にそれをことごとく吸収してしまう。性（セックス）のまわりで人は口を閉ざす。夫婦が、正当にしてかつ子孫生産係りであるものとして君臨する」（フーコー [1976：9-10=1986：9-10]）。

このようなブルジョワジー固有の性現象の選択は、それに付随する夫婦愛、子ども、母性といった価値を見出し、興隆しつつあった産業社会に適合的な生殖に関する生理的欲望とを架橋する場としての家族を定式化していった。結果的に、産業社会にとって有用な人間の生産に寄与し、多産・多死から少産・少死を実現することになった。しかし、いかにして子どもを少なく産むという実践がなされたのだろうか。

今日、いわゆる先進国と呼ばれる社会では、一般的現象として出生率の低水準状態が続いている⁵。とりわけ、フランスは他の西欧諸国に比べ、およそ一世紀早く、18世紀末から人口が緩慢にしか上昇しない、つまり低出生率という特異な現象を記録している。このような現象を実現するには抑制の装置の早期の成熟を見なければならない。しかし、ブルジョワ階級の政治的自己実現という観点から見れば、フランスはイギリスと比べれば遅く、しかもラディカルな形で市民社会を到来せしめた。法的に家族が男女の自由な性愛の結びつきと国家に連なる良き個人（子ども）を育てる場として定式化されたのは、1804年のこと（ナポレオン法典）であり、フランス革命（1789-99）を経験せねばならなかった。しかしながら、フランスにおいては、ブルジョワ階級の政治的自己実現がイギリスに比べ遅れはしたものの、家族に関わる人々の意識という側面から見れば、ブルジョワ的家族理念の実践が革命に先んじて実質的に実現されつつあったと言う他

⁵ 先進国といわれる各国の合計特殊出生率（2013年）は以下のとおりである。——日本1.43、アメリカ1.86、フランス1.99、スウェーデン1.89、イギリス1.83、イタリア1.39、ドイツ1.40——（平成28年人口動態統計の年間推計：厚生労働省）

はない。とすれば、ブルジョワ家族という限定をつける限りにおいて、その階級の政治的自立よりも理念の先行的展開があったという仮説を導く。フランスでは、なぜブルジョワ階級の、とりわけ少産という家族イデオロギーの先行的展開があったのか。

(2) 避妊と禁欲の慣習

17世紀から18世紀にかけての低出生率は晩婚の結果⁶でもあるが、避妊の慣行によるものでもあったことが知られている。この時代の避妊慣行（おもに性交中断）の普及は、これまで非キリスト教化に伴う道徳の一般的低下によって説明されてきた。つまり、避妊は都会的な奢侈（放蕩）への好みが生産制限の必要を生じさせ、それがやがて地方の農村地帯へと広まっていったとするものである。避妊という意図的な産児制限は、17世紀以降、都市の上層階級からはじまり、革命期の10年間に加速度的にフランス全土に広まっていったことが知られている（ルブラン [1990: 79]）。しかしながら、避妊がつねに放蕩における子どもの誕生を予防する目的だけで実施され、また同様の理由で広まっていったとは考えられない。というのは、それは合法的夫婦における合法的出産数の減少を説明できないからである⁷。

たしかに、「避妊」とはそもそも性行為における妊娠の回避を目的とするものであり、社会が婚姻の制度化と相続の秩序によって成り立っている以上、避妊の必要は婚外性交においてであると考えるのが普通である。実際、婚外性交における妊娠の回避は夫婦におけるそれよりも早く行われてはいた。だが、17世紀から18世紀にかけて、避妊は婚外性交ばかりでなく夫婦の寝室で実践されるようになったのである。夫婦であるからこそ子ど

⁶ 北・西ヨーロッパでは、17世紀頃から18世紀末まで、広く晩婚と女子の高未婚率を特徴とする結婚の傾向が認められることはよく知られている。フランスにおいて、平均結婚年齢は25歳（女子）から27歳（男子）であることがわかっている。このような結婚傾向は「ヨーロッパ型結婚パターン」と呼ばれている。

⁷ ルブランによれば、1670-1699年に労働者・職人層の平均子ども数7～8人、大名士層4～5人であったものが、1760-1792年には、前者5～6人、後者が3～4人と減少している（ルブラン [1990: 79]）。

もをもつこと、すなわち性交が許されるという認識が一般化されている社会にあって、家族内にそれまでに考えられなかった避妊という技術が導入されるには、それなりの要因が想定されるべきである。

では、夫婦における避妊の開始とその理由はいかに説明されるのだろうか。このことについての歴史家の見解は一定していない。フランスにおける産児制限は、子どもに対する配慮が大きくなるにつれて助長されてきたという、アリエスの逆説的な説明を支持・強化する説明が一方にあり、他方、それに反対するフランドランやショーターらからの批判もある⁸。子どもへの関心の増大が避妊を普及させたのか、避妊の普及が結果的に子どもへの配慮・関心を増大させたのか。このような問題は単純に説明されるものではない。子どもたち一人一人により良い世話を与えられるように子どもの数を少なく抑えようと望まれたという説は、「おそらく上層階級についてはあてはまるだろうが、しかし18世紀において子どもに関する態度がほとんど変化していない民衆階級については、おそらくあてはまるところは小さい」（ルブラン [1990：82]）とルブランは指摘している。また、ブリュギエールは、「死亡率の低下は、家族規模の増大を防ぐために産児制限を招き、同時にまた、（物心両面で）子どもに対する投資をはるかに大きくしていった。子どもの誕生も生存も、もはやまったくの偶然の産物ではなかった」（Burguière [1972：1128-38]）と述べている。これらは、避妊による産児制限を考察する上で重要な指摘であろう。つまり、意図として避妊が実践されたという事実に対し、乳幼児死亡率の低下や経済的要因から家族規模の縮小を必要としていたという機能的な説明は可能である。

また、この時代において、人々の中で少数の子どもしかもたなかった家族が結果的に夫婦の遺産相続者としての子どもたちに配慮せざるをえなかったということは、子どもへのまなざしを変える要因になったことは想像にかたくない。それゆえ、子どもへの配慮が先か、それとも産児制限が先かという、解決がつきそうにない問題を棚上げすれば、近代における子

⁸ フランドラン『性と歴史』、ショーター『近代家族の形成』等参照。

どもへのまなざしの変化というアリエスの指摘は斬新であったし、近代の子どもへの認識の転換に寄与したといえるだろう。事実、子どもへのまなざしの変化が子どもへの配慮という社会的に公認された心性を生み出したことは、否定しようがない。しかし、上層階級か民衆階級かを問わず、意図的産児制限がなされる前から子どもは彼らの遺産相続人であるからこそ投資の対象であった。それゆえ、生産構造の変化、医学衛生管理の進展と人口学的問題が上層階級のみならず民衆階級への産児制限を可能にし、子どもたちへのまなざしをも変更しえたという説明は説得力をもつ。しかし、この時代に行われた避妊は、夫婦の寝室で男が快楽の頂点に達した瞬間に性衝動を抑えて身を引くという禁欲的なもの（性交中断）であった。肉欲をもっとも否定したカトリックの国であるフランスにおいて、このような避妊をなぜ人々は受け入れ実践しえたのかという、性における夫婦の内面の変化、またそれを促す社会的要因が捉えられねばならない。

ブリュギエールは、18世紀後半になると、カトリックの教義における生殖を伴わない性的欲動の禁止は、避妊行動を実践するものたちを告白聴聞室から遠ざけ、結果として制御された快楽の技術として避妊が慣行されるようになったと説明している（Burguière [1972 : 242]）。フーコーが指摘するように、性の「学問＝科学」や「医学」の言説の普及を通して、性自体の言説化が人々を禁欲へと向かわせたという視点は重要である。

2. ブルジョワ階級の「性の管理」

(1) 性の抑圧…身体健康

さて、性欲の問題は夫婦の問題である前に、まず青年の男女の問題である。つまり、親の、とくに父親の決めた相手と漠然と結婚し、結果的に第一義に家産の保全に寄与することになった男女の結びつきに自分の好みという個人的感情が介入してきた民衆階級にとって、両者を満足させるような社会的文脈が必要になってくる。また、相変わらず婚姻による家産の保全を第一義におく上層階級にとっては、婚姻前の若者の性的欲望をいかにするかという問題を孕んでこよう。近代におけるこのような婚姻秩序の混

乱は、男女の結びつきにおける生物的欲求と感情、これまで家産の維持に貢献してきた世俗的慣習や法、あるいは宗教と道德の問題として理解される。たしかに性欲に関する抑圧の歴史は長い。遠くユダヤ、ギリシャの時代から、それは自己のテクノロジーとして様々な言説を築いてきた。さらに、中世の時代には、キリスト教神学によって「性」の一元的解釈が図られはした。以下で取り上げる若者の性、とりわけ自慰に関して、中世スコラ哲学は童貞を失わせる重大な罪と規定している。だが、それは基本的に罪、良心という道德の問題であった。

こうした事態は18世紀に一変する。周知のように、自慰のもつ致命的な危険という「医学的言説」が流布されるようになる。医学がキリスト教神学に取って代わったのである。医学的根拠によって自慰行為の禁止が展開される端緒は、1710年に出された『オナニア』（作者不詳）である。その後、スイスの医師ティソーが書いた論文『オナニズム』（1758年）は、自慰行為が知力、体力を全体に弱め、生殖器と腸に様々な苦痛と重大な障害をもたらすと科学的言説によって明言した。啓蒙主義時代の世論は、このような説に敏感に反応した。世論のキャンペーンが自慰行為を「恥ずべき罪」から「命の危険」へと転換するのに寄与したことは言うまでもない。

自慰行為がキリスト教による禁制のもとにおかれていたときには、それは見つければ罪となったであろう。しかしながら、科学的言説による禁止は、禁止の意味を世俗化することにつながっていく。つまり、自慰行為が精力の消耗であり健康を害するという新しい解釈は、罪として罰せられないけれども、それを行うものは自らの命を縮めるという脅迫である。このような科学的言説が流布され、しかも人々に信じられていくようになるには、その背後で「健康」という新しい価値が生み出されていたことを物語っている。ルソーはここでもその証人である。やや長いが、『告白』における彼のことばを引用しておこう。

わたしがイタリアから帰ったとき、まったく行く前と同じで帰ったのではないが、しかし、あの年頃の人間なら、そういう状態でもどらなかつたはずだ。つまり、わたしは純潔は失ったが、童貞は失わず

にもって帰った。年齢の進行が自分によく感じられた。落ちつかない気質がついにはっきりあらわれた。その際のまったく不本意な爆発のために、わたしは健康がどうかしたのかとびっくりしたが、これが何にもまさって今までわたしが性的に無知だった証拠になる。やがて安心すると、わたしは、わたしのような青年たちに、健康や元気や時には生命さえ犠牲にして、種々の放蕩をまぬがれさせるところの、あの自然をあざむく危険な手段を知った。…こういう危険な魅力のとりことなったわたしは、自然が与えてくれた、そしてその発育を待っていた立派な体質をむざむざ損なうようにせいだしたのである。(ルソー [1959 : 109 = 1968 : 155-6])

当時、このようなルソーの告白が特異なものではなかった。ティソーの論証に着想を得た自慰行為が健康に悪影響を及ぼすという言説は、まずそれを知りうる人々、すなわち啓蒙的な人々の間に流布されていく。もちろん、それはブルジョワジーであった。なぜ彼らがこのような科学的言説による危険にとりわけ敏感であったのか。それは、独身時代の長期化と無関係ではないであろうが、自慰行為が罪ではなく危険であるという医学的解釈はブルジョワ階級の価値と適合的であったからに他ならない。フーコーは次のように述べている。「貴族階級が社会階級として自らの区分を堅持し、保持するために用いたやり方を、別の形に置きかえて使うということがあった。いかにも貴族階級もまた、自己の身体の特異性を主張してきたからだ。しかし、それは血という形において、すなわち祖先の古さと婚姻の価値という形においてであった。ブルジョワジーは、自らに一つの身体を与えるために、反対に、自らの子孫と自らの生理的身体の健康という側に目を向けた」(フーコー [1976 : 164 = 1986 : 158])。

貴族階級の「血」の配慮は婚姻における系図の配慮であった。それは経済的な要請と社会的同質性の規則に根差している。だが、今やブルジョワジーの「血」の配慮は自己自身と子孫の性の健康へとシフトしている。彼らが貴族階級と決定的に異なるところは、「消費」ではなく「生産」を目的としていることである。まさにブルジョワジーの固有性と有用性はそこ

にこそある。医学的言説が自慰行為を精力の「消耗」というとき、彼らはまず、労働に敵対するゆえに体力浪費は無益であると感じるだろう。さらに、彼らは自己の身体とともに「子どもの健康」にも配慮せざるをえない。なぜなら、「性」は放っておけば、貴族階級のように無益な消費に至るものなのである。子どもたちが自慰行為に耽って健康を浪費したり、買春に走って性病にかかったりしようものなら、たちまち、彼らは再生産の輪を切断してしまうからなのである。だからこそ、ブルジョワジーは子どもの性の管理を必要とするようになるのである。

(2) 「無垢、純潔」というディスコース

ブルジョワ階級における青少年の性の管理は、18世紀に入り威力を持ち出した教育法によるところが大きい。この時期に研究された教育法は、キリスト教の禁欲主義的教育の理論と実践に世俗的権威となりつつあった科学的言説が根拠を与えたものである。また、科学的ないし医学的言説を用意したのは、「アマチュアの科学者を自認するパリの裕福な貴族」(タッカー[2013:94])たちであった。「性の教育法」では、プロテスタンティズムは孤独な内面的禁欲倫理の実践を、カトリシズムは修道会の伝統的な禁欲の実践を、それぞれキリスト教徒の守るべき使命と考えた。これらに加えて、先に見たように性に関する科学・医学的言説を熱心に実践していったのは、子孫への配慮を怠らないブルジョワ家族であった。

まず、キリスト教は可視的で直接的な性を日常生活のさまざまな場所から排除することに貢献した。たとえば、子どもたちにひとりで何かを着て寝ること、裸体を人に見せないようにすること、また、自分の性器を触れても考えてもいけないと説く。なぜなら、肉欲のありかである性器は人生の恥ずかしい呪われた部分の象徴だからである。さらに、それに性の衛生というもっともな医学的根拠が付与されていくのである。少年少女の性器への関心は、早熟な快楽や体力の損失、過度の欲望を招くと説かれるのである。庶民階級がひとつのベッドに親子や兄弟姉妹が寝ていた時期に、ブルジョワ階級の親は、その財であるがゆえに子どもを独りで寝かせるようになっていく。

革命前後のフランスで、ブルジョワ家族を中心に広まっていった、このような教育法は、伝統的なキリスト教の禁欲主義を継承しているが、それはもはや宗教的意味での禁欲主義ではなくなっている。それは魂のありかとしての肉欲ではなく、経済的効率的に有用な身体に価値をおいているといえる。ルソーが『エミール』のなかで展開する教育法も、まさにそれである。性に関しては、エミールもソフィも無知で無垢であるように教育される。それゆえ、エミールはことさら手仕事に精を出すように仕向けられるのである。ブルジョワ家族に課された性は、健康な肉体をもった正当な継承者を生み育てることである。そのためには、快楽と浪費は損失以外の何ものでもない。子どもたちはたちまち性から遠ざけられる。ブルジョワ家族は性に関して沈黙する。語らないことによって隠蔽される欲望としての身体は、子どもたちから排除され、彼らは無垢で純粋な身体としての価値を付与されていくのである。こうして「子どもは性をもたない」⁹というディスクールができあがっていく。

また、青少年たちが自慰行為や放蕩の禁止という性欲の抑圧が課されていくのとパラレルに女性の性欲そのものを無化する方向に進展していった。それは、極めて近代のものである「純潔」の価値がとりわけ女性の身体に刻印されていったことである。それはまず、女性の欲望は病気であるという医学的ディスクールから始まった。神経衰弱、ヒステリーなどは、女性の欲情のなせる病であり、それは血族の病気、遺伝的欠陥として陶冶の対象とされていく。このような病は健康な子どもの出産を妨げる。ブルジョワ家族は娘のこの種の病に目を光らせる必要を生じるのである。しかし、それはいかにして可能か。少年と同じく、まずは少女に自らの身体における性を意識化させないことである。また、農民の年頃の娘たちがパートナー探しにおける性行為が大目に見られていた時期に、ブルジョワの娘たちは、家族の沈黙と隔離された環境のなかで、自己の性的身体を意識化することのないように育てられていく。こうして、女性の性器は健康な子どもを産む限りにおいてその存在意義があるものとなった。したがって、

⁹ 先のルソーの「性に無知である」という告白は、なぜか自慢げである。

女性の身体の価値とは「純潔」ということになるのである。純潔であるということは、ただ身体的性経験の有無ではなく、「性については何も知らない」という無垢なる純潔である。

しかし、17世紀には、このブルジョワ階級の少女たちの性にはまだ自由があった。1665年に出版された『娘たちの学校』という会話小説は、真の意味で性に無知で無垢なブルジョワの娘ファンションに、世の中のことをよく知っている従姉妹のスザンヌが、自分の性体験を通して「性の教育」を施すというものである。ファンションは従姉妹の勧めで性行為を体験するのだが、彼女は、性行為について、「できるかぎり楽しい想いを味わい、悪い評判もたてられずに快楽をむさぼることは許されていてでしょう」（ミオー・ランジュ [1988 : 112]）と発言している。ルソーはこのような娘たちをよく観察している。『新エロイズ』のジュリもまた、家庭教師のサン＝ブルーと恋愛関係になり性的関係をもつ。それを従姉妹のクレールだけは知っている。結局、ジュリは父親の友人ヴォルマルと結婚するのだが、サン＝ブルーとのことは沈黙したままである。家の中に閉じ込めておくだけで娘の純潔が保たれるわけではないことは明瞭である。

(3) 生殖から排除される女

フーコーは、性的欲望の装置は、十九世紀に大々的に展開された四つの大きな戦略（子どもの性的欲望への組み込み、女のヒステリー化、性的倒錯者の特殊区分の確立、人口調整）を通して、性的欲望の装置が家族に組み込まれたと指摘する（フーコー [1976 : 150=1986 : 145]）。つまり、ブルジョワの自己管理のテクノロジーのなかに、女性の性的欲望の医学への組み込みがあったということである。ブルジョワ家族は娘に無垢でしかも健康という価値を付与していくために、「女のヒステリー」に象徴される「無垢でない女」、「健康でない女」を遠ざけ、うまくいくならブルジョワ階級の視界から排除したい。その最初の存在の一つが「有閑夫人」であったとフーコーは言う（フーコー [1976 : 160=1986 : 153]）。有閑夫人とは社交界での活躍もできないし、かといって家族のなかで家事や育児といった仕事があるわけではない、まさに暇な女性である。彼女たちは医学に

よって「神経を病む」女、「体気」に当てられた女、というようなレッテルを貼られて排除されるだけでなく、医学的に矯正されねばならないとされるようになる。なぜなら、ブルジョワの有用性に欠けるからである。貴族の残骸的な社交界の女性はまだよい。いつか滅びていくであろうから。しかし、ブルジョワ階級の女性は、ボタンを掛け違いと（産み育てる価値から見放されると）無価値な女へと転落するのである。そのような女性たちは何か美しい理由でブルジョワ家族を乱さないように囲い込まねばならない。

さらに、ブルジョワの娘たちは、無垢でない女、すなわち下層階級の性に自由な女たちと区別されねばならない。彼女たちは、性欲というブルジョワの娘たちには不必要な空気を運んでくるからである。ブルジョワ家族が召し使いの女、家庭教師にことのほか神経を使ったのはそのためである。しかし、ブルジョワ階級が性に自由な女たちを統制管理したかった理由は、実は娘たちに対する配慮というよりも息子たちへの配慮であったというべきである。彼女たちは、つねに性にまつわる病気の保菌者なのであって、健康な子孫というブルジョワ的価値を侵犯する者たちなのである。したがって、息子を囲い込むよりは、彼女たちを医学衛生管理の、あるいは逸脱の対象とする方が手っ取り早い。

フランスでは、貴族の性的放縱にもかかわらず、かなり古くから売春婦は浄化の対象とされてきた。しかし、18世紀のパリでは、淫売屋を営む職人の女房たちに社会的制裁を加える鞭打ちと追放の刑がひっきりなしに行われていたにもかかわらず、それは功を博することはなかった。つまり、売春婦狩りが頻繁に行われていてもその数が一向に減っていないのは、売春が空前の繁栄を見せていたことの証である。それは、おそらく、農村の経済的危機と関係があったであろう。土地から見放された家族、工業化がその職を奪った家族の女房や娘たちが自らの口を養うのにこれほど手っ取り早い仕事はないからである。しかし、どのような形で売春婦になったかは問題ではない。彼女たちに対する弾圧は、まず女子感化院への閉じ込めであった。後に、それは乞食とともに施療院¹⁰に送られていくことになる。この変化は彼女たちへの評価の変化を示しているように思われる。つまり、

彼女たちは宗教道徳的隔離に加え、医学的観点からも隔離される対象へと転換していった¹¹のである。このような制度外の性を矯正隔離しようとする動きは、逆にブルジョワ家族の価値を守ろうとする表れであることは言うまでもない。革命の過程でタレイランなどによって提案された教育改革は、「男女のあいだに明確な格差をもうけ、女性には主婦としての実用教育が課され」（水田 [1973 : 87]）だが、それは生殖を期待されるブルジョワジーの女性たちであったことは言うまでもない。

3. 生殖に拘束される母

(1) 子ども中心のブルジョワ家族

ルソーはその教育論において、アリエスに先んじて「子どもの発見」をしていることは注目に値する。つまり、子どもの固有の性質にプリミティブで無垢な自然性を付与したのである。ルソーは次のように言う。「本来の規則にかえることにしよう。自然は子どもを人から愛され、助けられるものとしてつくった」（ルソー [1969 : 315 = 1984 上 : 121]）。『人間不平等起源論』において、ルソーは人類の文明の発展を墮落と説いていたが、家族の生成期だけは人類のもっとも幸福な時期としていたことが想起される。成熟したものの価値が認められてきたフランス社会に、未成熟で無垢なものに価値を付与したのは、おそらくルソーが初めてではなかろうか。

さらに、ルソーは生まれたばかりの子どもの養育について極めて医学的知識をもって批判している。生まれたばかりの子どもの頭を木槌で整形する産婆、手足を拘束する窮屈な産着、母乳を与えなくなった母親等々を批判し、「母親が家にいること」「自分の子どもを育てること」の重要性を強調する。「子どもと一緒にいない母親は尊敬されなくなる。家庭は休息の

¹⁰ 有名なサルベトリエール病院は、アメリカ送りの控室といった観があったと言われている。

¹¹ 1789年、バスティーユ監獄やヴェルサイユへ行進し、フランス革命の発端をつくったテロアニュ・ド・メリケールは、養老院の《狂暴性精神病患者用》の鉄の檻に二十年以上閉じ込められ、1817年に亡くなった。

場でなくなる」(ルソー [1969 : 257-8=1984 上 : 39])、「母親がすすんで子どもを自分で育てることになれば、風儀はひとりでに改まり、…国は人口が増える」「ひとたび女性が母にかえれば、やがて男性はふたたび父となり、夫となる」(ルソー [1969 : 258=1984 上 : 40]) という¹²。

ルソーがこのような認識をもつに至ったのは、当時フランス、とりわけパリなどの都会では、上流階級、庶民階級を問わず、子どもが生まれてから数年間、乳母のもとへ送る習慣があったからである。商人の妻は自分が子どもを産むと貴族の子どもを引き取って乳母の仕事をし、自分の子どもはもっと貧しくしかも遠いところへ里子に出すことが当たり前であった。しかし、このような習慣はやがて非道徳、自然でないとい攻撃されるようになっていく。それには子どもに対する新しい観念が入り込んでこなければならぬ。子どもに対する新しい観念と世論の形成には、18世紀のフィロゾーフ、医者、教育者の影響が大きかった。彼らは、大人になってからの道徳的・心理的性質は子ども時代の環境によってつくられると主張するようになる。また、規則や強制、罰は子どもを害すると主張し、子どもの性質や考え方をよく理解することが教育にとって重要だと説く。このように、子どもを特別な対象とする思想の展開は、同時に母親が子どもを養育することによってのみ、健康で徳のある子どもに育つという言説を作り出した。ルソーはこのような知見を当然吸収していたであろう。『エミール』『新エロイズ』における子ども観、母親観は当時の先端的知識に裏打ちされてもいたといえる。このような教育観を真っ先に受け入れていったのは、小説や教育書の読者でもあったブルジョワ階級の女性たちであった。

(2) 未婚の母と私生児——ブルジョワ家族の背理

子ども時代を人間の成長の特別な段階と考え、家族を親密で調和的な社会の単位とみなす思想の展開とブルジョワ階級によるその実践は、しかし、また逆説と差別を生み出すことにもなった。つまり、アンシャン・レジエ

¹² このようなディスクールに現代の母親も翻弄されている。働く母親の多くは子どもと一緒にいられないことに罪悪感をもっている。

ム期のフランスではとりわけ捨て子が多かった¹³のである。ドゥラセルは「18世紀パリの捨て子」という論文の中で、この時期に増大した捨て子の原因に貧困と放蕩を挙げているが、「未婚の母親に対する社会的抑圧や偏見、身を滅ぼしたという評判は、同時に強力な誘因であった」（Delasselle [1975 : 78]）と指摘している。たしかに、制度外の子どもを出産することは、いずれの時代にも、またどこでも母子ともに社会的スティグマの対象ではある。しかし、なぜ、子どもや家族の価値がとりわけ讃えられ出した時代に婚外出産や捨て子が増大したのであろうか。

この頃のフランス社会では教会で聖別された婚姻関係のみを合法的とみなし、それ以外の関係を許容していない。そこで、この合法的関係以外の関係で生まれた子どもには、聖堂区司祭によって洗礼を受ける際、必ず「非合法の *illégitime*」、「私生児の *naturel*」、「父親不明の *ignoto patre*」などの形容詞が冠されていたという。したがって、未婚の母や私生児がすでに教会によって差異化されていたのである。しかも世俗の権力は未婚の女性あるいは寡婦の妊婦に「妊娠届出書」なる義務を負わせていた。これは嬰兒殺しを予防することを目的としたものであったが、妊娠を届け出る女性にとっては非常に辛く屈辱的なものであったようだ。このような辛い義務を負わされることがわかっていながら、なぜ多くの女性たちが婚外出産せねばならなかったのであろうか。彼女たちが自ら進んで快樂を目的とした性行動に走ったとは考えられない。とすれば、彼女たちはどのようにして未婚の母への道を辿ることになったのであろうか。この当時の風俗記録を行ったモリノ神父の記述を引用してみよう。

普通の人々がたえず、手練手管でだまされるのを見るのは悲惨なことである。欲動に傾きやすい年齢の未婚の男たちの間で働く少女たちは、避けることのかなり困難な誘惑に晒されているのである。つまり、大きな屋敷では、彼女たちは従僕のなぐさみものになった。その場合、はじめは主人のおもちゃにされたあとということがしばしばで

¹³ ルソーもまた5人の子どもを捨てている。

あった。そして女主人に解雇される。(Abbé Montlinot [1790 : 6])

当時の全出生数に対する非嫡出子の比率は、農村に比べ都市に高く、それは20%を超えるところすらあった。この数字を担う女性たちの社会的出自は明白ではないが、捨て子の半数以上が非嫡出子であったというから、「私生児」と烙印を押された子どもを抱えて生きていくことがいかに困難であったかが想像される。モリノが記述した少女たちの相当数がこのような捨て子の母であったのだろう。彼女たちは出産によって世間から「過ちを犯した」という烙印をおされてなお子どもを育てることはできなかっただろうし、また子どもを抱えていては働くこともできなかったであろう。妊娠届出書の記録によれば、彼女たちの大多数は住込みの召し使いや農場の使用人であったという¹⁴。彼女たちには捨て子への道しか残されていなかったのである。

しかしながら、未婚の母や私生児の増大は台頭するブルジョワ階級がその家族から性における快樂を分離し、生殖の単位に置き換えたことがもつとも大きな要因であるということもできる。未婚の母や私生児は排除された快樂の結果なのである。ブルジョワの理想的な家族像が喧伝され、そのような家族が支配層の家族形態となっていけばいくほど、性の抑圧と経済原則に従って未婚の母や私生児はその背理として構成されていく。

ルソーは、教育書『エミール』の著者でありながら、同棲していたテレーズ・ル・ヴァスールとの間にできた5人の子どもをデイドロに勧められ、すべて孤児院に送り込んだ。『告白』において、ルソーはこのことを自己弁護してはいけないと言いつつ、そのあとでかなりの紙数を使って自己正当化を行っている。礼儀正しく、正直でまっとうな職業についている人々（近衛士官や近衛騎兵の将校、商人、金融業者、軍の食糧御用商人）が集まる食卓では、「ひどい目にあわされた正直者、欺かれた夫、誘惑さ

¹⁴ 江戸時代末期の川柳に、「下女の部屋振動これ池袋」というものがある。これは江戸の近隣の村から働きに来た少女が奉公先の主人に手籠めにされたことを詠ったものである。このような少女たちは、結局女主人から暇を出されて行き場を失う。場合によっては未婚の母の道を進ることになった。

れた妻、人目を忍ぶ出産、こういったことがここでのごくあたりまえの話題だった。そして、孤児院にいちばんたくさんの子供を送り込んだものが、いつもいちばん賞賛されていた。…これがこの国の習慣なのだから、ここに住む以上はそれに従っていいはずだ」(ルソー [1959: 344=1968中: 109])と。また、ルソーはテレーズの家族(とくに母親と兄)を悪しざまにいい、子どもを捨てる理由とした。「こんな育ちの悪い家族に子供らをまかせて、彼らよりもっと育ちが悪くなったら、と違ってぞっとした。孤児院の教育の方が危険がずっと少なかったのだ。」(ルソー [1959: 415=1968中: 214])と。「孤児院の方が、危険が少ない」という発想は言い訳でしかない。当時、乳児が孤児院で生き残れる確率は天文学的に低かった。仮に生き延びたとしても、孤児院から出された孤児の行く末は悲惨なものであったことは想像に難くない¹⁵。では、ルソーは子まで生した性の対象者テレーズに何を求めていたのだろうか。ルソーは晩年になってテレーズと結婚という形をとったが、彼女に恋愛感情をもつことはなかった。結局、テレーズは、ルソーの恋愛の対象でもなく、ルソーとの子どもの母親であることをも拒否された。彼女はルソーにとって生活上都合の良い女であったとしか言いようがない。

しかし、テレーズと同棲しながら、ルソーはドゥドト夫人に熱烈な恋愛感情をもつ。彼はその恋を「わたしの生涯ではじめての、たったひとつの恋」(ルソー [1959: 445=1968中: 248])と告白している。ルソーのドゥドト夫人への恋愛は一方通行であり、結局叶わぬものであった。その叶わぬ恋愛の想いを夢想のなかで結実させようと書かれた小説が『新エロイーズ』である。この書簡形式の小説において、ルソーは女主人公ジュリとサン＝ブルー(ルソー自身)との恋を成就させるが、彼らの恋を結婚には結実させない。このルソーの性愛と結婚に対する意識のありようが特別であったわけではない。この時期、恋と生殖システム(家産相続システム)

¹⁵ 教会付属の養育院に連れてこられた子どもたちは10歳まで生き延びるのに十分の一のチャンスしかなかった。革命前には、年に600から700の子どもの取戻し要求があったにもかかわらず、取り戻されたのは年平均3～5人という悲惨なものであったという(Delasselle [1975: 76])。

としての結婚は直接結びつくことはなかった。しかし、ジュリの選択した結婚は生殖に従属する母への途であった。それはまた、次の支配階級であるブルジョワジーの理念となり、女性を家庭に閉じ込めていくことになる。

4. ルソー思想における「妻・母像」

ルソーはその誕生とともに母を失った。おそらく産褥熱であったのだろう。それが原因であったとは言えないが、彼は『新エロイズ』、『エミールとソフィ』において、子どもゆえに母を死なせる。生殖を終えた母は生きている意味がないのか、それとも子どものために死ぬのが母なのか。

『新エロイズ』の物語は、貴族の娘ジュリとその家庭教師サン＝ブルーとの恋愛が秘密裏に成就されるのだが、それは病床にあるジュリの母に知れ、母は娘の身を案じながら他界する。ジュリは自分の恋愛が母を死に至らしめたという罪の意識に捉えられ、恋の成就としてのサン＝ブルーとの結婚を断念し、父の決めた婚約者（父の友人）ヴォルマルと結婚する。そしてジュリは二人の子どもを産むが、水遊びをしている子どもを助けようとして、彼女の母親同様、死の床につく。『エミールとソフィ』は、『エミール』の未完の後日談である。ソフィはエミールとの子どもを二人産む。娘と息子である。ところが、娘が死に、ソフィを打ちのめす。気晴らしを狙ったのか、エミールとソフィは都会で生活するようになる。このとき、エミールを育てた先生はもはやいない。エミールもソフィも、ルソーが軽蔑していた都会生活で自らを失っていく。ソフィは夫でない男の、子どもを身ごもる。そして、ソフィもエミールとの子も死んだようだ。

(1) 妻に求められる貞淑

ジュリにとって母の死は、サン＝ブルーとの恋愛を諦める契機となり、恋愛感情のない父の友人と結婚するのである。彼女は結婚の儀式の日を「わたくしをあなた（サン＝ブルー）から、またわたくし自身から永久に取り上げることとなった…生涯の最後の日」（ルソー [1976 (二) : 282]）と規定する。そして、結婚後のジュリは「有徳/貞淑 la vertu」となるのだ

という。彼女は死ぬまで貞淑であり続けるのだが、自分の農園（クララン）にサン＝ブルーを招き入れるのである。今日のわれわれの感覚では理解に苦しむところであるが、ヴォルマールはともかく、サン＝ブルー（ルソー）はどのような立場でクラランに暮らすことができたのだろうか。

サン＝ブルーはジュリの子どもになったのではなかろうか。これはルソーにとって経験済みである。『告白』によれば、ルソーはジュネーブを出奔し放浪しているとき保護してくれたヴァランス夫人の元で暮らしている。夫人はルソーをジャン＝ジャックではなく坊や（petit）と呼んでいた。母を知らないルソーにとって、ヴァランス夫人は母であると同時に恋する女性であったのだらうと思われる。ドゥドト夫人との恋に破れたルソーにとって、彼女の代替であるジュリはヴァランス夫人（＝母）になったのではなかろうか。エミールにとって、ソフィは性愛の対象としての妻であると同時に、彼女に支配されていることを喜んでいる。「最愛の妻の足許にあって、己れは、生きとし生けるもののなかでもっとも幸福な存在だった。愛こそが、己れを彼女（ソフィ）の掟に従わせ、彼女の支配下に置いたのだ」（ルソー [2012：1084＝1979：489]）と述懐する。つまり、夫は家庭の中で妻の子どもになるが、妻に性愛の自由はない。

ソフィの不貞がわかると、夫エミールは豹変する。「悪徳というよりはむしろ過失をせめられるべき女、悔恨によってその過失の償いをしている女は、憎しみよりは憐れみに値する」（ルソー [2012：1090-1＝1979：496]）。「妻の不行跡は、選び方が悪かったのか、しつけのいたらぬせいかは知らないが、夫のせいにするのが当然なのだ」（ルソー [2012：1091＝1979：497]）。不貞の妻は憐みの対象であり、また夫のしつけが悪いからであるとエミールはいう。妻は夫にとってまさに所有物である。ところが、このような夫婦関係は当時のパリの上流階級のそれではない。夫は妻の婚外恋愛を放任するのが普通であった。それをルソーは「良俗に対する無関心」「いかなる名誉にも値しない魂の下劣」（ルソー [2012：1092＝1979：497]）であるという。ルソーは妻の不貞に「良俗に反する」という道徳的認識を示したといえる。これは来たるブルジョワ階級の婚姻における倫理である。

(2) 母の存在意義としての子ども

さて、ソフィは母であるがゆえに死ぬことになるが、『新エロイズ』のジュリもまた母であるために死ぬことになる。ジュリもソフィも子どもゆえに死んでいく。ジュリは文字通り、溺れそうなわが子を助けて命を落とす。ソフィはどのようにして死んだか定かではない。しかし、娘を亡くし、絶望の淵にいたソフィをパリという都会に連れ出し、あれほど嫌っていた都会生活をさせたのはエミールである。それにもかかわらず、ソフィが最愛の娘を亡くすという最後の試練に、「すでにぐらつきはじめていた彼女の堅固な操は、彼女を見放してしまった」（ルソー [2012: 1071=1979: 475]）という。そして、ついにソフィは、「エミールさま。もはや私はあなたにとって何者でもないのだということをご承知おきください。別な男があなたさまの褥を汚しました。私はみごもっております。もはや私に指一本お触れになつてはなりません」（ルソー [2012: 1078-9=1979: 483]）という。

エミールは、妻が夫ではない男の、子を産むことに対し怒りに燃える。「妻は、自分の二人の息子に同様の愛を注ぐことによって、自分の心を二人の父親のあいだに分かつことを余儀なくされるのか。…ソフィが別の父親の子どもを抱いているのをみるくらいなら、わが子が死んだほうがましなのだ。」（ルソー [2012: 1095=1979: 501]）と。エミールがどれほど怒ろうとも、ソフィは帰ってはこない。ルソーは最終的に母親であるソフィに軍配をあげる。エミールは、ソフィを「息子から引き離すということは、私にとっては理にかなったことであるが、彼女にとってはそうではない…私は母親から子どもを取り上げることしか考えていませんでした…子どもから母親を取り上げるという事態を考えてみなければならなかった…私は間違っていたのです」（ルソー [2012: 1101=1979: 507]）と悟る。ルソーはエミールの成長過程から母を排除していたが、エミールの子どもから母を奪うことは間違いだという。それは、「子どもから母親を奪うなんていうことは、とくにその年齢においては、取り返しのつかない損害を子どもに与える」（ルソー [2012: 1101=1979: 507]）からである。

ルソーは子どもと母親を強く結びつける。まさに子どもは母親の存在根

抛でさえある。母は子ゆえに死なねばならない。自らの死と引き換える捨て身の母は、しかし、最強の権力者であるということもできるだろう。

おわりに

ルソーは、『人間不平等起源論』において、自然的不平等を取り除くことはできないが、その不平等を社会的不平等の根拠にしてはならないという。産むことと授乳はたしかに生物学的女性（メス）にしかできないことである。しかし、資本主義経済は〈授乳〉ができることを資本とみなすのである。当時のフランスで乳母が当たり前のように乳という財を売っていた。インドでも同様であった。スピヴァックは自分の子どものために生産する乳は「必要労働」だが、主家の子どものために生産する乳は「余剰労働」であるという（スピヴァック [2000: 340]）。当然のことながら、乳を売らねばならない女性は社会的に乳を買う女性よりも貧しい。つまり、それは政治的経済的不平等の結果である。しかし、それは、生物学的男女間の不平等に根差しているのだから、経済的に平等になればなくなるというものでもない。問題は、生物学的に出産した女性へ課される「母性愛」を「自然」という言説に読み替えることである。出産しても乳の出ない女性はいるし、出産によってルソーの母のように死に至る女性はいるのである。人工ミルクのない時代、母乳は再生産にとって必要であっただけである。

問題は、子産みが女性の生物学的事実であるとしても、ルソーが人間の再生産に対し、女性に過度の「母性幻想」を押しつけていると言えることではないだろうか。ルソー思想に大きく影響を受けたエレン・ケイの「母性」¹⁶概念は、日本の近代化過程で、女性解放思想を支えた女性たちばかりでなく、医学的言説を通して中産階級を形成しつつあった女性たちに多

¹⁶ ルソー思想に影響を受けたエレン・ケイの著書は、『児童の世紀』、『婦人と道徳』、『婦人運動』、『恋愛と結婚』、『母性の復権』など、多数が日本で翻訳されている。とくに、日本への紹介は母性概念を中心とするものであり、『母性の復権』は1914年に出版され、1919年には平塚明子（らいてふ）によって翻訳されている。

大な影響を与えた。

【引用および参考文献】

- Abbé C.-A. Leclerc de Montlinot. 1790 *Observations sur les Enfants-Trouvés de la généralité de Soissons*, A Paris, De L'imprimerie Royale, M. DCC.XC. Source gallica.bnf.fr/ Bibliothèque nationale de France.
- Ariès, Ph. 1972 *Problèmes de L'éducation, La France et Français*, Gallimard, et autres = 1988 中内敏夫・森田伸子訳『<教育>の誕生』新評論。
- 1973 *L'Enfant et la vie familiale sous L'Ancien Régime*, Seuil, = 1980 杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。
- 浅井美智子 1996 「フランスの『近代家族イデオロギー』に関する社会史的検討 (1) セクシュアリティの変容と性の管理」『山梨県立看護短期大学紀要 第1巻第1号』。
- 1997a 「フランスの『近代家族イデオロギー』に関する社会史的検討 (2) 『近代家族』の政治的統合」『山梨県立看護短期大学紀要 第2巻第1号』。
- 1997b 「ジェンダー視角からのルソー思想の検討——二つの共同体、その相互補完のディスクール」『理想』No.659 理想社。
- 2005 「近代の性的主体の構造——ルソーの『告白』を手がかりに——」『人文学論集』第23集 大阪府立大学人文学会。
- Bourdieu, P. 1972 <Les stratégies matrimoniales dans le système de reproduction>, *Annales: Économies, Sociétés, Civilisations*, 27 juillet – octobre. (英訳<Marriage Strategies as Strategies of Social Reproduction>を合わせて参照。)
- Burguière, A. 1972 <From Malthus to Max Weber: Belated Marriage and the Spirit of Enterprise> *Annales: Économies, Sociétés, Civilisations*, 27 juillet – octobre. transl. Ranum, P.M.
- Delasselle, C. 1975 <Les enfants abandonnés à Paris au XVIII^e siècle>, *Annales. : Économies, Sociétés, Civilisations*, 30 janvier – février.
- 藤田その子 1983 「さまよう未婚の母たち——アンシャン・レジーム末期の私生児出生」『西洋史学』129号。
- デュビー, G.編 1988 福井憲彦・松本雅弘訳『愛とセクシュアリティの歴史』新曜社。
- Flandrin, J.=L. 1981 *Le Sexe et l'Occident*, Seuil, = 1987 宮原信訳『性と

歴史』新評論。

- Foucault, M. 1963 *Naissance de la Clinique: Une Archéologie du regard Médical*, Presses Universitaires de France. = 1969 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』みすず書房。
- 1976 *Histoire de la Sexualité Vol. I La Volonté de Savoir*, Gallimard. = 1986 渡辺守章訳『性の歴史 I : 知への意志』新潮社。
- and others 1988 *Technologies of the Self: A Seminar with Michel Foucault*, = 1990 雲和子訳『自己のテクノロジー』岩波書店。
- 稲本洋之助 1985 『フランスの家族法』東京大学出版局。
- ルブラン, F. 1990 「避妊のはじまり」デュビー・G. 編『愛とセクシュアリテの歴史』新曜社 所収。
- Macfarlane, A. 1986 *Marriage and Love in England: Modes of Reproduction 1300-1840*, Basil Backwell = 1999 北本正章訳『再生産の歴史人類学——1300～1840年 英国の恋愛・結婚・家族戦略』勁草書房。
- マルクス, K. 1960 = 1974 中原稔生訳『フランスにおける階級闘争』大月書店。
- ミオー, M.・ランジュ, J. 1988 菅原孝雄訳『娘たちの学校』ペヨトル工房。
- 水田珠枝 1973 『女性解放思想の歩み』岩波新書。
- 1988 『女性解放思想史』筑摩書房。
- 宮崎孝治郎編 1962 = 1978 『新比較婚姻法Ⅲ』勁草書房。
- Rousseau, J. = J. *Émile ou De L'Éducation* = 1984 今野一雄訳『エミール 上・中・下』岩波文庫。
- *Julie ou la Nouvelle Héloïse* = 1976 安土正夫訳『新エロイーズ 一・二・三・四』岩波文庫。
- *Les Confessions* = 1968 桑原武夫訳『告白 上・中・下』岩波文庫。『エミール』『告白』『新エロイーズ』原書は、1959-1969 *Œuvres complètes de J. = J. Rousseau*, Édition publiée sous la direction de B. Gagnebin et M. Raymond, Bibliothèque de la Pléiade, 4 tomes, Paris. 所収を用いた。
- *Émile et Sophie, ou Les Solitaires* = 1979 戸部松実訳「エミールとソフィ または孤独に生きる人たち」『ルソー全集』白水社 所収。原書は、2012 *Œuvres complètes de J. = J. Rousseau*, sont publiées avec le soutien de la Fondation, Édition Slatkine, Genève. 所収を用いた。
- Segalen, M. 1986 *Sociologie de la famille*, Paris. = 1986 English translation *Historical Anthropology of the Family*, Cambridge/ New York/ Melbourne. = 1987 片岡陽子他訳『家族の歴史人類学』新評論。
- Shorter, E. 1975 *The Making of the Modern Family*, New Tork = 1987 田中俊宏訳『近代家族の形成』昭和堂。

- セレブリャコワ, G. 1973 西本昭治訳『フランス革命期の女たち 上』岩波新書。
- ストラバンスキー, J. 1973 松本勤訳『透明と障害』思索社。
- スピヴァック, G. C. 2000 鈴木聡他訳『文化としての他者』紀伊国屋書店。
- 竹内敬温 1990 『「アナール」学派と社会史——新しい歴史へ向かって』新曜社。
- Tucker, H. 2011 *A Tale of Medicine and Murder in the Scientific Revolution*, c/o Stanford J. Greenburger Associates, inc., New York = 2013 寺西のぶ子訳『輸血医ドニの人体実験——科学革命期の研究とある殺人事件の謎』河出書房新社。

【謝辞】

大阪府立大学において、伊田久美子さん、田間泰子さんと私の3人でジェンダー論の講義を担当したことが懐かしく思い出されます。その後、女性学研究センターの一員となり、伊田さん、村田京子さん、堀江珠喜さん、熊安貴美江さんと女性学研究・講演会等ご一緒させていただき、大変勉強になりました。また、女性学研究センターの伊藤ゆきこさんには本当にお世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。